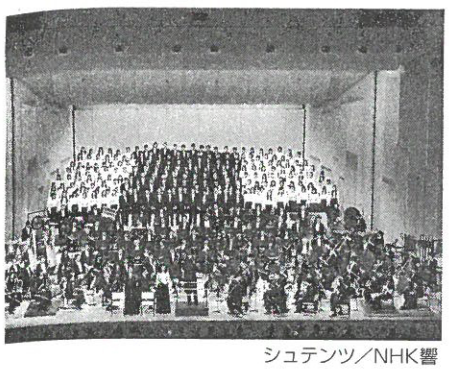
## オーケストラ 東京ニューシティ管弦楽団（第71回）

音楽監督兼常任指揮者として東京ニューシティ管と東京合唱協会を率いる内藤彰。当夜はまず故髙田三郎の遺作を初演。日本民謡をモティーフとする《5つの民俗旋律〜管弦楽のための》で、未完の第5曲〈じょんがら節〉のみマイヤー＝フィービヒが補作。聞き覚えある鄙びた旋律が大編成の器楽で野性味を増し、第1曲〈北海荷方節〉から管楽器のソロがいずれも熱演。第4曲〈かんちょろりん節〉ではチェロの雄渾なメロディも印象深かった。続いて同じく髙田の《無声慟哭》。宮沢賢治の5編の詩に音楽がつけられ、第1編〈永訣の朝〉など鈴木憲夫の合唱曲でも知られる名詩。しかし、髙田の取り組みはナレーター（南美希子が好演）を置くことで、妹を失う兄の想いに「天空からの眼差し」を介在させるもの。合唱団の集中力張る演奏と共に百合道子（S）の柔和な声音、清水宏樹（Br）の温和な響きも堪能した。後半はブーランク《スターバト・マーテル》。後年の《カルメル会修道女の対話》を予見させる音楽語法が目白押しで、哀切な響きに満ちる一方で、第4曲の牧歌的な境地など想定外の面白さ。第1曲を締め括るフレーズの透明感、第5曲の爆発的な叫び、第10曲のサラバンドでの重厚な弦合奏など、合唱団とオーケストラの底力を体感した。**11月12日・東京芸術劇場 ●岸 純信**

## オーケストラ NHK交響楽団（第1686回）

ケルン歌劇場の音楽総監督として活躍するマルクス・シュテンツが客演。マーラーの大作《復活》交響曲を指揮して、ヨーロッパ音楽界の第一線でしのぎを削る俊英の一人ならではの意欲的な解釈を聴かせてくれた。当然ながら、世界のトップ水準ではすでに過去のものとなった熱血的指揮ではない。作品の構造を的確に分析して、無駄のない克明なタクトで、隈取りのはっきりとした、だが洗練された造形の音楽を進めてゆく。確固たる拍子取りは一瞬たりとも音楽を流さない。N響も高度な合奏力で鋭敏に反応。聴き手は、マーラーの音楽テクスチャーの生成と変容を、まるでコマ送りの画像で見届けてゆくかのよう。だが、けっして平板にはならず、たとえば第1楽章の後半、切れ味鋭い造形を重ねたあと、フェルマータ（253小節）をたっぷりと生かして息を飲むような沈黙の瞬間をつくる。第2、第3楽章も歌よりは構造を重視した音楽づくり。緊張感と分裂症的危機を孕む音楽に、第4楽章で、アンケ・フォンドゥンクの温かみあるアルト独唱が救いの光を投げかける。終楽章では東京音楽大学合唱団が大編成ながら緻密かつ音楽性豊かに、シュテンツの気迫溢れる棒に応えた。なるほど、マーラーにとって「復活」とは、新たな「天地創造」だったのだ。**11月19日・NHKホール ●岩下眞好**


シュテンツ／NHK響

## オーケストラ 関西フィルハーモニー交響楽団（第225回）

ブラームス「交響曲第3番」と一柳慧の作品という、前半と後半でくっきりと区分けされたプログラム。藤岡幸夫が指揮。最近のこのオーケストラの響きはかなり水準が高くなっている。いわゆる肩の力が抜けたサウンドとなってきていて、そのためだろう各パート間のバランスが良くなり、美味しい食べ物が当たり前のように口に入ってくるのに似て、どのコンサートもいい意味での、あと味の良さを残すようになっている。この日のブラームスもそう。藤岡はとりたてて奇をてらう解釈を示すわけではないため演奏を記述するのは難しいのだが、やや重心の高い姿で、ブラームスとこの作品のエッセンスは聴き終わったあともしっかり残った。この日のメインはおそらく後半の、一柳のオペラ《愛の白夜》からワルツという、それだけ聴けば口当たりよい曲のあとに演奏された「ジャズ」と命名されたピアノ協奏曲。独奏はこの曲を捧げられた山下洋輔。聴き手としては前衛的な書法の音楽とフリージャズがどのような対話をするのかと身構えていたが、驚くほどの楽しい音楽が鳴り、山下もフリージャズのスタイルよりもオーソドックスなジャズのイディオムプレイを繰り広げて新鮮だった。**11月19日・ザ・シンフォニーホール ●網干 毅**

## オーケストラ 読売日本交響楽団（第498回）

カンブルランのプログラムはしばしば意表を付く。今回はコンスタン編曲のドビュッシー《ペレアスとメリザンド》交響曲（1981）、コルンゴルト「ヴァイオリン協奏曲第1番」（45）、ブリテン編曲のマーラー「交響曲第3番」第2楽章《野の花が私に語ること》（41）、そしてシューマン「交響曲第4番」第1稿（03出版）である。カンブルランの指揮の特徴は微細な音の表出の見事さと、整った形で音楽を作るところにある。その作りは繊細でありその響きは実に美しい。それはドビュッシー＝コンスタンの作品で最初から聴き手を捉えた。ブリテン編曲のマーラーを選んだところにも、その意図がうかがえる。マーラーの厚い響きが軽やかになり、壮大な音楽が華麗な音楽となっている。コルンゴルトの協奏曲のソロ（ヴィヴィアン・ハーグナー）が線の細いのが残念だが、カンブルラン好みの繊細な響きだ。エンターテイナー的作曲家コルンゴルトらしく、旋律豊かな曲で第2楽章は特に音色彩も豊か。印象派風な響きは指揮者好みであろう。シューマンは、第1稿では通常聴いていたものより響きの透明度が高い。どちらがいいかは好みの問題だろう。展開部後半が圧縮されているだけでなく、全体が同一動機から導かれたことが明瞭となる引き締まった構成だ。こうした演奏においてカンブルランは真にその力を発揮していると思う。**11月29日・サントリーホール ●佐野光司**

ハーグナー（vn）、カンブルラン／読売日響 © 浦野俊之

## オーケストラ 東京都交響楽団（第706回）

インバルのブルックナーは別格だ。いわゆる〝枯れた〟演奏ではない。一言でいえば意気軒昂。かつてブルックナーの交響曲のスペシャリストたちの多くは老成した長老のイメージがあった。しかしインバルは違う。いたずらにテンポを遅くすることもなく、また意味深にもったいぶった表現もしない。最初から最後までプリプリと生きがよく颯爽とした息吹が漲るっている。特に感銘深いのはブラスの扱い。厚味はあるが重くならない。オケ全体にしっかり融合した密度の濃いバランスで響かせる。オルガン演奏に長けたブルックナーが思い描いた理想の響きをここに聴いた感じがする。とかく複雑に迷走するかのような形式構造についてもインバルの解釈は明晰極まりない。この「第6番」は小規模ながら、ブルックナー的音楽の生理や節理は濃厚。感銘したのは〝じらし効果〟。緩急はもとより剛と柔の両極の楽想のコントラストを折り重ね積み上げていく手法のメリハリのつけ方が実にしたたかだ。それでいて演奏時間は60分を切った。インバルのみならず都響にとっても会心の出来ではなかろうか。前半のモーツァルト「ヴァイオリン協奏曲第3番」はソロコンサートマスターの四方恭子が独奏。強靭な資質と表現力の強さを感じさせる演奏が印象に残った。**11月29日・東京文化会館 ●齋藤弘美**

四方（vn）、インバル／都響